

風鳴さんちのお姉さん

数多 命

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

連載が滞ったので、息抜き。

XVで弾けた結果でもある。

目次

風鳴さんちのお姉さん

—
1

風鳴さんちのお姉さん

「ねー、しゃー！」

その小さな手と、拙い言葉が。

私の命を許してくれた。

それが、全ての始まり。

——ネオンから離れた、暗闇の中。

足音だけがはつきり響く。

濡れ羽色の髪が、溶け込むように夜風に揺れる。

時折街灯に照らされる、整った顔立ち。

アンダーリムのメガネが目立ちがちだが。

レンズの奥の瞳は、負けないくらい存在感を放っていた。

その肢体も申し分なし、頭のとっぺんから足のつま先まで、無駄な脂がない引き締まった体。

着込んだビジネススーツが、彼女の印象をさらにプラスへ引き上げていた。

背負った釣り竿バッグが歩くたびに揺れるのを楽しむ一方で、纏う気配は修羅そのもの。

一挙手一投足に、闘志を静かに滾らせ。

目的地向かっていたのだった。

「」

やがて、立ち止まる。

切れ長の目を滑らせると、周囲を囲む複数の人影。

「——くんぼんは、お嬢様」

「ええ、くんぼんは。中々の出迎えて、苦勞をかけますね」

「ふふふ、貴女様の為なれば、この程度」

交わされる会話。

文面は和やかながら、流れる雰囲気は剣呑そのもの。

「——ええ、そうですとも」

ゆらりと、空気が動く。

「歌い喚くだけの妹君を、今ひとたび後継へ据える為ならば……！」

瞬間、膨れ上がる殺意。

咄嗟に体を傾ければ、首元を掠める刃。

蹴り飛ばして距離を取り、続く背後の奇襲を投げて避ける。

壁を背に見据えれば、まだまだ健在な敵の数々。

挑発の為に、わざと面倒だと言いたげにため息。

次の瞬間、釣り竿バッグのフアスナーを裂くように開けば。

現れた刀が、瞬く間に握られた。

「狼狽るな!! 数で翻弄しろ!!」

「来るぞー!」

白い柄と黒い鞆の、シンプルな拵えを見るや否や。

動揺を走らせる集団。

だが、彼らとて洗練された武人達。

刀一本にいつまでも怖じ惑わない。

悠々と歩き出した標的へ、全方位から飛び掛る。

一方の彼女は、眉一つ動かさない。

振り下ろされる凶器が目前に迫ってもなお、沈黙を保ち続けると。

「——ッ」

「ふべっ!?!」

次の瞬間、裏拳を叩き込んだ。

流れるように殴打を次々叩き込み、集団を突き飛ばす。

そうして自分の周りに余裕を作ると、刀の柄に手をかけた。

夜闇の中、月明かりを反射した刀身がすらりと顔を覗かせて。

刹那、閃く。

「……あ?」

「なっ……!?!」

振り下ろされた、思ったら。

彼女に背を向けられた一人が、胴体を両断されていた。

右と左が泣き別れて、重々しく倒れる。

鮮血の噴水をバツクに、ゆったり納刀する彼女。

念のために言っておくが、相対している彼らもまた十分な実力者の集団であり。

日本という国を、影ながら守ってきた有力な一族の一つなのだ。

本来なら、腕に覚えがある程度の国賊など、ひとたまりも無い。

しかし、今回彼らにとつて不運だったのは。

目の前にいる彼女が、それを軽く凌駕する『バケモノ』であることだっただろう。

「——私用ではありませんが、この後予定が入っております」

構える、居合いの型。

彼女が最も得意とする、斬撃の構え。

「早々に終わらせてもらいます」

刀身が、唸りを上げて解き放たれる。

——風が吹いた。

一陣の、風。

気付けば、背を向けた彼女が、血を振り払っているのが見えて。ふと、視界がずれた。

続けて視点が一気に落ちて、地面と大差ない高さへ。

「——へ」

口から、間の抜けた声が漏れる。

目玉を動かすと、自分の下半身が突っ立っているのが見えた。

「おい」

「ば」

「ぐえ」

周りの仲間達も、似たような有様だった。

首を断たれ、三枚におろされ、達磨にされて。

各々同じ色の水溜りを作りながら、次々地面へ零れていく。

「—— お家が途絶える、信用を失う、そもそも命を失う」

彼女は依然、ゆったりと動く。

「風鳴に逆らうとは、そういうことですよ」

刀が、鞘に納められて。

ぱちん、と、鯉口が鳴った。

刹那、次々と崩れ、血溜りに沈む『賊』達。

死体に囲まれ、しんと静まり返った中。

気配を研ぎ澄ませ、周囲を探り続けていた彼女は。

やがてふっと息を吐き出して、鬨気を霧散させたのだった。

血の臭いでむせ返りそうなか、徐に指を鳴らす。

「お呼びですか？お嬢」

「ええ、後始末をお願いします」

「かしこまりい♪」

現れたホスト風の青年がにこやかに答えれば、続々と黒服たちが現場に入ってきた。

「後はお任せください、お嬢は先約があったでしょ？」

「ええ、なので先に発ちます。苦勞を掛けますね」

「なんのなんの、どうぞ楽しんできてくださいな」

彼女個人としては、最後まで監督したかったのだが。

青年の言うように、今日は先約があった。

なので、そちらを優先させる。

走る、走る、走る。

改札を駆け抜け、電車に飛び乗り。

到着駅にて、預けていた荷物をロッカーから出して、急いで着替えて。

そして、

『ブロッサム』さーん！こっちこっち!!」

「すみませんッ！間に合いました!?!」

「間に合いましたよー!!こっちです!!」

ざわつく会場内。

待ち合わせていた複数人と合流。

と、同時に。

証明が落ちたと思ったたら、色とりどりに輝いて。

軽快な音楽で、会場が満たされて。

用意されたステージの上。

駆け出してきた少女が二人。

「みんなー！今日は『ツヴァイウィング』のライブに来てくれて、ありがとなー！！」

「終了まで、全力で楽しんでってください！！」

赤毛の少女は快活に、長髪の少女が精一杯に手を振れば。

更にボルテージが上がった。

それは、観客席の彼女も。

『風鳴裂羅』も、例外ではなく。

「翼あああああああ！今日もかわいいですよッ！！翼アアア——！！」

仲間達と一緒に、元気いっぱいサイリウムを振るのであった。